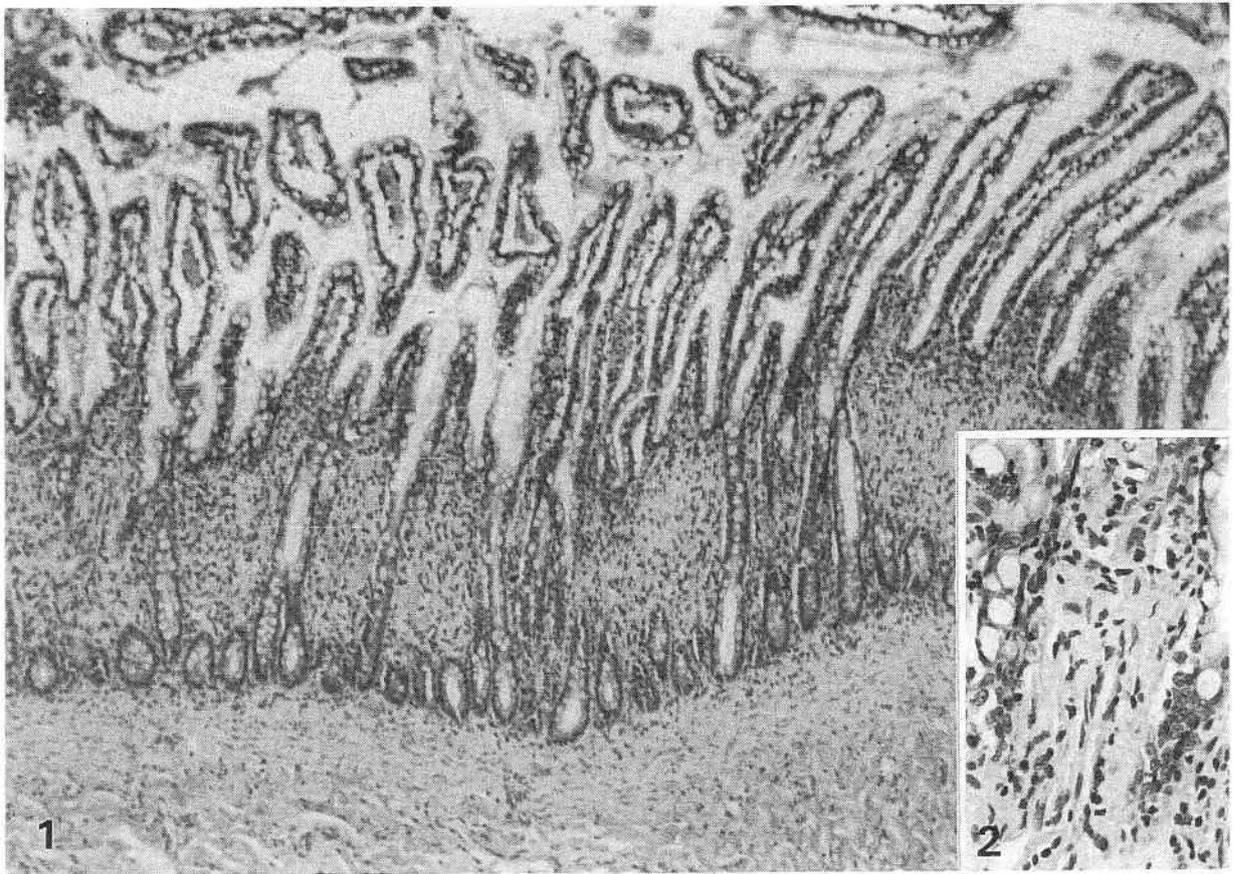


猫の回腸

岩手大学農学部家畜病理学教室出題 第39回獣医病理学研修会標本No.753



動物：猫，日本猫，雌，16歳。

臨床的事項：1週間位前から嘔吐と下痢を繰り返し、食欲がほとんどなくなってきた為、1997年7月25日に某動物病院に来院。体重は8.4kg、体温は39.3°C、血液生化学的検査では、Ht45%、WBC15,550/mm³、GPT32U/l、GOT40U/l、ALP48U/l、BUN38mg/dl、Cre2.1mg/dl、CPK2,129U/l、LDH277U/l、Alb2.9g/dlであった。バリウム造影検査により下部消化管における通過障害が疑われ、7月30日に開腹手術を実施し、回盲部約18cmが切除摘出された。当研究室にはホルマリン固定材料として送付されてきた。

組織学的所見：回腸の腸絨毛下部の粘膜固有層中間層に主座して、ヘマトキシリン・エオジン染色標本で弱好酸性に染まる均質無構造物の広範な沈着がみられた(写真1)。この沈着物は、マッソントリクロム染色では青色、アルーシアン青染色およびPAS反応は陰性、コンゴー赤染色も陰性ということで、

均質無構造物は膠原線維と判定された。これらの領域においては細胞反応は乏しく、僅かに好酸球、リンパ球および形質細胞浸潤が認められた(写真2)。また、大腸移行部にも同様の沈着物が軽度に見られた。

考察および診断：組織学的には回腸粘膜固有層における重度の膠原線維の増生・沈着が特徴病変ということで、「猫の回腸粘膜固有層における広範な膠原化(線維沈着性)腸症(Enteropathy associated with extensive collagenization of the lamina propria in the ileum of a cat)」と診断された。病変的には人のcollagenous sprueに類似していたが、スプルーでは沈着部位が上皮直下に主座すること、重度の腸絨毛異常を伴うことなどから否定された。また、好酸球肉芽腫・胃腸炎の慢性病変としても捉えられるのではないかという意見もだされたが、原因・疾患名は確定することができなかった。